氏名：平野　稔也(青年海外協力隊)
滞在国：タンザニア
職種：理学療法士
タイトル：ザンジバル日記(Habari za Zanzibar)18

「海外で何かできることはないだろうか」
数年前…自分がこんなことを考えていた。
そして、今。
2年間、アフリカというよく理解もしていない国に来て
ボランティア活動をした
今の自分が思うこと。
それが今回の「最後のテーマ」

活動（ボランティア）について　「今の自分だからわかったこと」

　ここに至るまで、この2年間で想像もしなかったことをたくさん体験することができました。
「語学の壁」
言葉が理解できないとこんなにも人は大変な思いをするのかと考えさせられました。
「宗教」
日本ではあまり意識しないですが、宗教を中心とする生活スタイルは考えさせられることが多かったです。
「生活習慣」
食事ひとつにしても食べるものも違いますし、食に対する感覚も全く違ったものがありました。
「人間性」
挨拶を大切にする習慣や人の暖かさ、人を見る視点自体も異なったものがありました。

　私が行ってきた活動は主に、病院での理学療法業務のサポート(マンパワー)と学生指導、及び業務効率改善サポートになります。特にマンパワーに対する考え方は、ボランティア生活を送る中でも一つの大きな課題だと思います。しかし、「できること」「やるべきこと」はたくさん隠れており、どんな人でもどんなことでもできる！そんな環境でもありました。

海外で何かできることできたのか？

　この答えはとても難しいと思います。ひとつのゴール地点(目標)から見たとき、その答えが“NO”に近いと思います。しかし、一つ一つ行ってきた活動に意味があります。大きな変化でなくても小さい変化を生むことができます。大きな結果を出すためには小さな変化の積み重ねであることを考えると、答えが“YES”に変わっていくのかもしれません。
　ずっと昔に私が思っていた「ボランティアになったらこうしてやろう」と思っていたことは

自分の価値観の中でやろうとしていたことだったと気づきました。実際に求められていることは現地の人の声から考える必要があります。例えば、
「そんな相手に配慮もない様な格好や姿勢、取り組み方ではダメだ！！」
「そんな意味のない会話をするんではなく、もっと仕事をしなきゃ！！」
こんなことをはじめは常に思い、訴えかけてきました。
　しかし、そんな「無駄」「意味のないこと」と私が思っていることが現地の人たちにとって大切なことでした。
　常に日常における“当たり前”が大前提で違っているのです。

現地の人たちは何を求めているの？

　では、実際の現地の人たちが何を必要とし、何をボランティアに求めているのか？ということになりますね。
　これはボランティアの力の見せ所なのかもしれません。ボランティアも人ですから何かのプロフェッショナルの人もいれば、身体一つで来ている人もいます。任地で求められているものがはっきりとしている場所もあれば、何も必要としていない場所もあります。
　ここで大事なことは、現地の声に傾けることと、それを共に形にしたり、挑戦することで得られる反応こそが現地の人のありのままの反応、そのものなのかなと私は思います。なので、住んでいるだけでも、声を聞いているだけでもわかりません。
　共に行い、やり遂げる、達成する。要するに受動的ではなく主体性をもって行うことで何かがわかってくるのかなと思います。

今後の自分を考える

　2 年前、小さいけれども志を持ちながら挑もうとした自分。今は、その志を少しでも大きくし大切にしていきたいと思っています。
　人のためにしていきたいと思っているその気持ちこそが、この 2 年間で自分をもっと具体的な姿へと変えていってくれるような気がしています。
　今後はこの経験を日本に還元していければと思っています。そして、より多くの人たちがアフリカを含めた世界に少しでも関心を持ち、正しい情報が得られ、何かを感じてくれる人が少しでも増えていくことを…祈りながら。

終わりに

2 年間、ありがとうございました。
とても長い、2 年間を私は楽しむことができました。
少しでもこのレポートから何かを感じたり、知ってもらえれば幸いです。
それでは、また日本のどこかでお会いしましょう。

平成 28 年度 2 次隊　ザンジバル　理学療法士隊員　平野　稔也